



農子

○大鉢の浮草の影と白い雲
日盛りの門扉の蛇に後戻り
曇天の子燕低く乱れ飛ぶ

初江

○道の辺に脱ぎっぱなしの蛇の衣
○草を刈る少し離れて山羊の声
萍も線状降水帯の中

瑞枝

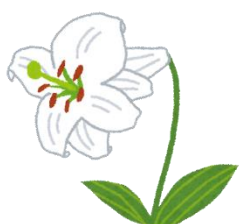
○万緑や父の腕かひなの力瘤
○萍や寅さんのまた旅に出る
夏草や名画に沸きし旧駅舎

郁子(土)

○通学路子らの囲める小さき蛇
○萍の流れにまかせ今日も暮れ
○夕風に蛍袋の鐘かすか

酔花

蛇となり上流めざす波頭
晩春の後姿の安らけし
通り雨にうきぐさの花連れ去られ



えり

○萍や四の五の言わず身をまかす
小金持蛇衣きぬを脱ぐ時知れり
金財布蛇むくろの蛻を隠し持つ

志津子

○子かまきり逃げつつかまを振り上げる
夕闇ゆやみを尚深くして百合の花
泣いてやる事はないぞと青芒

富子

繰り返す脱皮だっぴはしても蛇は蛇
萍うきぐさも楽しみありて空を見る
紫陽花を活けてはみたが声はなく

千代

○萍と風のおしゃべり夕間暮
蛇の舌ちろちろコインパーキング
干上がりし中洲きらりと蛇の道

郁子(岡)

○浮草やゆるゆると風やさし
青大将道に飛び出し急停車
里山に山百合凜ときわだちて

迪子

○風の思い受けてゆらゆら浮草は
蛇踏んで青ざめし夢やぶれ傘
ミニトマト毎朝声かけ母心

祐幸

祝辞めく長きうねりや台風来
しのめの血の滾たぎる鮎奈半利川
今生と黄泉の君なり初蛸

文子

神棚に蛇の衣ある叔父の家
朝靄の寺の紅蓮開き初む
あめんぼう己より太き蛾を捕ふ

味元 昭次 作品

蛇泳ぐ彼の世此の世と身を曲げて
梅雨寒し蛇と教師は紙一重
糸とんぼ乗せ萍の楽しみぬ

★次回市民句会

【開催日時】

令和六年七月二十四日(水)

午後一時十五分～午後四時(予定)

【場所】

オーテピア4階 研修室

どなたでも自由にご参加いただけます

